

# 思春期の子どもと親

— 様々な家族から見えてくるもの —

国 松 清 子

奈良文化女子短期大学

Adolescent Children and the Parents:  
From Various Cases of the Families

Kiyoko Kunimatsu

*Narabunka Women's college*

筆者は臨床心理士として思春期の子どもとその親から相談を受ける機会が多い。特に思春期の子どもと出会えるのは筆者にとって実に興味深いことなので、今回はその経験を取り上げてみたいと思ったのである。思春期は発達的に見ても大きな変化を遂げる時期でもあり、その変化が本人や家族を戸惑わせるかのように問題が生じがちである。たいていは本人というよりその家族が相談にやってくるのだが、その姿は似ているようで違って様々な姿をみせてくれる。幾つか代表的な家族の姿を描きつつ、思春期とは何かを考えながら、思春期を前にしてもがく親たちに焦点をあてて“人が育つ”こと、それを支えるということについて考察してみたい。

キーワード：思春期、家族、不登校

## 1. 始めに

昔、何かの授業で学んだと思うが、思春期を称して疾風怒涛の時期と習った記憶がある。筆者も人並みではあるが思春期を経験してもがいた記憶があるし、友人たちの激しさに胸を動かされた記憶がある。自分自身の子育ての時もやはり思春期はハラハラして、気を使い、腹を立てることもあった。実に頼もしく、しかし、危なっかしく、魅力的でもあるこの思春期の子どもの姿を描いてみたい。筆者の現在の臨床現場は本学に設置された「親と子の相談室 ひまわり」とスクールカウンセリングとして実践している学校、それから保健所等の医療機関領域である。思春期ともなれば子どもが素直に相談にやってくるのはあまりなく、ほとんどがその子を抱えて途方にくれた親たちである。親の叫びのようなものを聞きつつ、これほど大人を動かし、悩ませる存在の大きさを思わずにはいられない。特に子どもの不登校でやってきた親の痛ましい姿やその途方にくれる様は共にいる筆者にとっても重いものである。焦点は

---

国松 清子 〒631-8523 奈良市中登美ヶ丘3-15-1 奈良文化女子短期大学

親、家庭にあるが、様々な親や家庭が存在する。また、一口に思春期といってもその姿は千差万別である。筆者なり様々な事例を取り上げながら、似たような現象や病理によって分類したうえでその姿をまとめてみたい。

## 2. 親子関係から見えるもの

子どもが小さな頃は親はその存在の全てを知り、知っているからこそ十分な世話を焼くことができ、そのおかげで子どもは生きていくことができる。しかし、子どもが段々と自分でできることは自分でできるようになってくると、親も次第に世話を焼かなくなり、子どもも親が常に傍にいらなくても困らなくなってくる。

学童期になると親の知らない秘密を持ち始めたり、学校生活のすべてを話すのではなく都合のよい話だけをしたり、と親といってもそのすべてを知っているわけではなくなってくる。やがて第2次性徴があらわれだす頃になると思春期特有の反抗期が始まり、心身共に親との間に距離が生じてくる。世話を焼かれるのを極端に嫌がったり、口うるさく注意されることも嫌がって時には反撃すら行動としてあらわす。何でもわかっていた我が子が、知らない顔を見せ始めることで親を戸惑わせ、不安にさせる頃である。この反抗的な態度が親を混乱させるほど激しい人もいれば、反抗的な態度があっても極めて大人しい程度に留まる人もいるように反抗にも色々あるし、それに対応しなければならない親の態度もまた色々である。また、思春期までの発達が順調だった人の場合とそうではない人の思春期の現れ方にも特徴があるのかなのか、こうしたことも事例をあげながら見て行こうと思う。親の側にしてもある程度健康な発達を遂げた大人として親になった場合と何らかの傾向や問題をはらんでいながら親になった人ではまた、思春期を迎えた我が子の受け入れ方は異なってくるだろう。これも、事例から見てみたいと思う。

## 3. 思春期、青年期に見られる諸問題

思春期には身体的な成熟が急速に始まり、性ホルモンの分泌によって第2次性徴が促進されて、男子は声変わりや身体などの発毛、性器の成熟などが見られる。女子でもやはり初潮とともに身体の変化が生じて、胸が膨らんだり、丸みを帯びた体型へと代わる。そしてこれまでに経験しないような激しい内的衝動に揺さぶられることになる。これも、ほとんど表に出ない程度の人から激しい行動となって荒々しく見える人まで様々である。子どもであって、もはやこれまでの子どもではない、しかし、大人でもない、というなんとももどかしい一時期といえよう。

そもそも反抗期とは何だろう。どうして似たような現象が生じるのだろうか。人の発達現象からみると誰もが経験して、誰もが知っているような、多くの人に共通した現象であることは言うまでもない。赤ちゃんがお座わりするようになると次は歩き出す、といった誰でもが知っているような発達の現象の一つではある。発達の観点から見ると思春期は児童前期から成人期へ移行する過渡期にあって、パーソナリティの形成の第2の重要な時期でもある。この指摘は2500年前にかの有名なソクラテスが青少年

の逸脱行為に触れて、当時の考え方として特にパーソナリティの形成のために親子関係の情緒的な交流の必要性を説いて今日と全く変わっていない。パーソナリティの発達観点からみると、出生から幼児期までの間が第一の発達のピークとすると、次のピークは思春期青年期である。第一のピークがパーソナリティの基本的な構造や外観が育っていくとすると、第2のピークは身体の変化（第2次性徴）と共にその基本的なものが質的転換を遂げる時期である。親に依存した子どもであることを止めて、親から距離を置き、別の人格を自分でつかんでいこうとするが、これまで依存していただけに、依存と反抗の狭間で彼らなりに苦しむし、それを見て親は混乱をきたす、というのがよくある現象であろう。ある母親が息子の態度の変化に驚いて相談に来たことがあった。いつものように朝起こしに行くと、急に「うるさい、来るな、あっちへ行け」と怒られ、機嫌が悪い。自分が母親として何か間違ったのかと混乱しておられた。よく聞いてわかったことは、母親が違和感なく子どもに近づき、身体に触れようとすると特に怒りが大きくなる。そこで母親に言ったことは、彼はもはや小さい時の自分ではないことを母親にどう伝えてよいのかわからなまま、思わず怒鳴ると母親が離れてくれるからそうしているのではないか。彼も事態をどうしてよいのかわからないだろう、とにかく母親から距離を取ってやることだと伝えたのである。彼も混乱しながら怒鳴っているのであって、母親が何か間違ったわけでもなく、彼自身も母親を傷つけないわけではないことを説明すると母親は安心した。次回にやってきた母親は前回と違って落ち着きを取り戻して、再び彼と話しが出来るようになったことを報告した。これまでのように自分の一部のような存在として彼を扱うのではなく、新たに彼を知ろうとして距離を置いて見る様になったからである。通常の事態でもこのような嵐が家庭で生じてしまう。

通常ではなく、不登校の事例群の中で筆者がこれまでに経験したケースを分類してみると以下のようである。

- ① これまでに未解決だった問題が思春期で表面化しやすい。
- ② 依存が強く、分離が困難となり反抗は生じにくい
- ③ 子どもの反抗に対抗する親

不登校という問題が生じて、あらためて自分達を見直し、建て直し、家族の危機に立ち向かっていく時、それは全て違った姿があり、その時の子どもの成長する姿は又一様ではなく、皆違っていいのだという実感を筆者はもっている。

## 4. 実際の事例から（内容は事例に基づいてはいるが守秘義務のため一部変えてある）

「」は筆者の発言である。“”は相談者の発言である。

### 4.1 ① A君の場合 ―不登校？いや反抗？―

Aは高校の進学校に入って親も喜んでいたのに2年の一学期にはいじめ？をきっかけとして行かなくなった。Aは何も言わないが、クラス生から彼に対してちょっとしたからかい事があったと担任は知った。Aはそれを認めるでもなく、最初は寝てばかりで親としてあきれられるばかりであった。段々と起きている時間が増えてはきたが、一向に登校しないので朝は特に起こす母親と本人とでもめる。時には父親まで口を出して大事になることもあった。高校では友人はあまりいなかったが、中学までの友人達が心

配して時々来訪して、外へ連れ出してくれた。その内に父親にアルバイトをしたい、それを許してくれたら登校するという。父親は登校するなら何でもいいとすでに考え始めていたので直ちにOKを出し、彼はファーストフード店の厨房に入った。毎日夕刻から数時間働いて帰ってくるが、油まみれになっていた。母親は毎日洗濯が大変であったらしいが、とにかくこれだけは熱心に行くので母親も洗たくに必死となった。夜遅く帰宅してクタクタで朝起きられず登校はできなかった。母親はアルバイトが彼の社会経験としてよい機会になる、と考えを切り替えて彼を支えたが、夜の帰宅がままならなくなった。父親が夜遅く帰宅した息子に激怒して体当たりをしたがかえって父親がひっくり返される事態にまで発展した。その内にバイクを買って夜な夜なバイクで走り回るようになった。母親はもうお手上げと言わんばかりに息子について激しい不満を吐いた。

幼い頃から喘息で小学校の時は長期入院もし、母親は治療に必死であった。しかも家の埃やダニが原因とわかってからは毎日家中を掃除し、彼の布団を干す、という大変な生活を続けてきた。今も時々苦しそうな喘鳴を聞く時があり、ひどくならないか不安にもなるが、一方でこのような生活をしている彼に腹を立てていた。今も彼のいない間に部屋の掃除をし、布団を干す毎日である。母親がこのように彼の生活をコントロールしようとしたためか彼は自分自身の身の始末は今もほとんどできない。毎日の学校から持ち帰った物の管理や生活の時間的な計画など、全て本人がしようとしなさい、という理由で全て母親がしてしまっていた。実に手のかかる子どもである。一方5歳下の弟はそれを見ていたせいいか何でも自分でして全く手がかからず病気もしない。母親はこうして話しながら、弟には自分でしてくれるからという理由で兄と比べると本当に手をかけてこなかったことに気がついた。弟の方も親と兄とのトラブルを黙って見ていただけだが、最近になって母親に“どうしてお兄ちゃんばかりに”と泣きながら訴えてきたという。このことを母親と話し合い、その後母親は彼の部屋の掃除や布団干しをぷつりと止めてしまった。止めて初めて、最近は大きな喘息の発作も起こしていないという事実にも気がついた。一切止めても発作は起こっていないのである。おまけに彼の部屋でタバコの吸い殻を見つけ喫煙していることにも気が付き、それでも発作は生じていないことに気がついた。母親は自分がどれだけ気を使い、エネルギーを費やしてきたかについて話しながら、それが何か間違いを起こしていたことにも気がついて、彼への怒りと嫌悪感は頂点に達してとうとう、“あの子は私の子なんかじゃない”と叫んでしまった。叫んでから、自分でも驚いたように我に返り、恥じ入った。

程なくして彼はとうとうバイクの事故を起こして怪我をして帰宅、その後ぷつりとバイクには乗らなくなった。やがてバイトも辞めてしまって完全に家に引きこもるようになった。友達が来ても断るようになり、入浴もしなければ着替えもせず、洗面も当然しなくなり、毎日着たきりのパジャマで過ごすようになった。母親はもう何があっても動揺することなく、食事など必要な世話だけをして彼を見守った。時々フケだらけのままで居間に出てきてパソコンをいじった。彼の去った後には大量のフケとベトベトした油分の指先の後があちこちとついていて、これも黙ってぬぐった。日常的な会話（テレビ番組や食事など）なら何もなかったように話しあうが、学校については彼はダンマリのままであった。その内に期限が来て2年生を留年とした。弟は中学生となり、クラブに学校にと懸命に頑張り、母親はそれに懸命に付き合っている。母親自身は彼について気持ちが落ち着いてくるにつれて、こころにポカンと穴が空いたように感じられてきて、自分自身を振り返る余裕が生まれた。

夫は子ども中心の生活を考えて妻には家において欲しがったが、彼女はもともと働き者であったらしく子ども達が大きくなってからは半日だけの仕事を持ち、子ども達が帰る頃には家にいる、という生活をしてきた。友人たちとは昼間のお付き合いならと夫に言われ、たまに食事を一緒にするくらいで遊ぶこともない。しかし、母親は映画鑑賞が好きでこの頃から盛んに試写の情報を調べては熱心に応募し、当選すると夜間ではあってもさっさと1人で見に行く、という生活を始めた。そして見た映画の話を居間でするようになり、それを聞いていた彼もいつの間にか映画情報を調べるようになり、ある日当たった映画の事を知って自分も一緒に行きたい、と言い出したのである。母親は驚いたが、伸びた髪の毛もきれいにしたい、身体もきれいにしたい、など条件をつけると彼は本当にその日には何時以来かわからないが、お風呂に入り、髪の毛を束ね、さっぱりとした格好で行こうと声をかけてきた。これまでたまに家の近くのビデオ屋や図書館へビデオや本を借りに行っても、返済時には返しに出かけることが出来ず督促状ばかり届いていたので、母親はまさか乗り物に乗って外へ出かけることはあるまい、と思っていた。しかし、本当に一緒にでかけたのである。久しぶりに彼と行動を共にし、映画と一緒に見て、帰りは見た映画について二人で話し合った。この日以来彼とはたびたび映画に同行するようになり、同時に様々な話ができるようになっていった。高校はどうするのか彼が決めるのを待っていたが、とうとう退学を決め、その手続きも自分でするように促すと、なかなか学校へは出かけられないままであったが学年末を迎えてようやく彼は手続きを終えた。家族として一段落を迎えることができたのである。再登校にこだわっていた父親も母親から説得されたり、彼に恐々話しかけてもあしらわれたりするうちに黙るようになった。父親は成績のよいAに期待を抱いてきただけにその心中は察してあまりあるものがある。退学以後どうするかは何も決められないが、彼は家族の一員として普通の生活ができていて、家庭は落ち着きを取り戻した。彼のやり直しを支援する家族の準備は出来たといえる。

#### 4.2 ② B子さんの場合 一病んだ家族の状況を変えたい

普通でいたい、と苦しみつつ反抗に全力を傾けるB。来談は常に父親であるが、母親にも問題があった。そのためにも家庭には困難があった。以下は父親から聴取した経過である。父親によると、母親は子どもの頃からの強迫神経症に悩み、それを知りつつ結婚した。結婚生活は強迫的な行為の調子のいい時もあれば、とても悪い日があったりしながらこれまでやってきた。妻にはよくなってもらおうと色々話したり、言い含めようとはしたが今もほとんど変わらない。子どもができると一層強迫的な行動は厳しくなり、夫のことまで構ってられなくなった。それでも自分としては仕方がないと諦めて、とにかく子どもが育つことを優先した。Bの発達はとても順調で、早くから字も覚えて何でもわかってしまうので、このままいくとどのような大人になるのかと怖いくらいで秘かに期待もした。しかし、幼稚園では子どもを嫌がり、登園を渋った。園児たちがくだらないことをするのが嫌だったらしい。休んだり行ったりしていたが、小学校では直ぐに授業がつまらなくなってしまいクラスも嫌だったが友達はできてきて、幼稚園よりは登校していた。しかし、本人はいじめだと盛んに訴えて2年生途中から不登校となった。3、4年はなんとか休み休み行ったりし、放課後は友達とノビノビと遊んでいた。母親が無理強いして学校に行かせようと強くでると行く時もあったりして、我々もどうしていいのかわからず無茶苦茶をしていたように思う。学校の先生は全く頼りないと思った。それでも修学旅行や遠足などは参加した。

中学受験のために塾にも行かせたが、成績がよくどんどん上がるのももっとも、と調子に乗っていたように思う。塾の先生と一緒に成績のあがることだけに必死になっていたと今はとても反省している。途中からBが勉強をしなくなってきたが、それでも母親は彼女を責め立てていて父親まで同じことをしまい、受験には合格したものの結局行かなくなった。その後ますます具合が悪くなり夜は眠らなくなる、起きていると興奮して泣き叫ぶ、母親の指示には全く従わない、という大きな変化がBに起きてしまった。母親は小さい時から彼女にはこまかい指示を多くだして、いちいち修正するなどして、彼女は小さかったのでそれに一々応じていた。しかし、今は母親の指示に“うるさい”と叫んで従わず、母親を遠ざけるようになった。一方では不穏となり不眠や暴れる行動が出現した。クリニックに受診して薬の投与を受け、夜間は母親と一緒に眠って母親に対して赤ん坊のようにされるままになっていた。Bは盛んに頭がおかしい、と訴えて日中でも大声で叫ぶこともあった。それも次第に落ち着いてきて、中学校の友人たちが時々遊びに誘ってくれるので出かけるようになった。その時は別人のように穏やかな顔をしている。帰宅してもご機嫌であり、この子には友人が最も必要だと思う、と父親。母親には子どもを責めてばかりではなく、子どもを守る母になれと強く父親から言った後、母親は彼女に色々言いたいのに我慢している。片づけなくても、食事時間が合わなくても、言ったことをしていなくても我慢している。母親としては、学校にも行かないのでちゃんとしなければと思うのに、娘に何もできなくて、こんな自分が嫌だと母親はボーっとしてしまっている。夫の食事もしっかりと作らないと思っていて準備するのだがちゃんとしようと思うあまり何も進まず、夫が帰宅しても何もできていないことがよくある。くたびれ切っているのがわかるので夫も何も言わず自分でしている。Bは母親があまり言わなくなったので、段々調子よくなり、日中起きていることが増えて、穏やかである。それを見て母親がこのままではと思ったのか何かさせようと強く出ると、とうとう母親に乱暴を働いた。母親は驚いて家を出てしまったが、その間父親との二人きりの生活を二人で助け合ってやれた。夕食は父親が用意すると彼女が後始末をする、といった具合であったのに、母親が家に戻ってしまうと彼女も元にもどり何もしない。

母親が少しでもBに何かの指示をだすと、今ではすかさず母親を罵倒したり、時には乱暴を働く。母親は娘を思うように動かすことができないことで、ますますぼんやりしてしまっている。母親としての胸中は親として自分の子どもをコントロールできない、という意味で自分の責任感に無力を感じてしまっていて、自分を責めてしまっている。このために、何もしていないが疲れ果てているのが夫にはよくわかり、妻には自分を救うために受診をして欲しい、とこれまでに何度も言い続けてきているが自分を救おうとはしない、という。妻の家庭にも問題があって、今も実家ではよい娘であろうと必死で、それなのに妻の姉ほどは認められてもいない。夫が結婚の申し込みに初めて実家に行った時も、この子にも嫁入り先があってよかった、という態度であった、と夫は妻を不憫がっている。しかし、母親としては娘を追い詰めることもしてしまうので困る、と父親として娘を理解して娘を助ける親になって欲しい、と願い、相談機関へも一緒に行こうと誘うが、最初のころの病院での受診以来、全く行こうとはしなくなった。小学校3、4年生の時、不登校で受診したのだがそこでアスペルガー症候群の疑いを言われたことがあった。それ以来、娘も受診を嫌っていて、結局父親だけが助けを求めて走り回ることになっているのが現状である。

父親へは、筆者から「母親については治療は困難なことが多いので強制することなく娘に大きな影響がないことをよしとすること、彼女も母親からのこだわりだと思われる、しつけとして強制された行為を今は拒否できてきて、むしろ、友達との束の間の遊びを楽しみにするようになり、より子どもとしての世界を求めることができているのでこれを最も優先すること、これは彼女の健康な部分である。父親とは現在落ち着いた付き合いができてきているので、健康な大人として眼前にいてやって、彼女の話し相手となること」、などを助言した。中学校では不登校で最も精神的な危機を迎えていたにも関わらず、両親はどことも受験しないことへの不安が大きく、やはり無理やり受験をさせて合格している。一応高校生である。同じ中学校から進学した生徒もいて彼女はむしろそれを大切に思って受験したふしがある。しかし、登校はもちろんほとんどないので父親はこの不安に押されて相談にきている様子もあった。皆と同じように高校生としてどこかに所属して欲しかったのである。いつもの友人たちは月に一度くらい誘ってくれて、その誘いを待っている様子である。まだ自分から誘うことはできないのでひたすら待っているらしい、メールをよくチェックしている。その内に彼女から高校は辞める、と宣言されてしまう。形だけでも所属して欲しかった父親として不安は大きくなったのだが、それよりも「彼女がこれから何をしようとしているのか、そこに関心を持ってつきあって欲しい」と伝える。彼女は本を読むことは好きだし、知識を得ることは簡単にできる人である。「高卒にこだわるなら、高校認定試験制度もあるし、単位制や通信制の学校もあるので彼女ならその気になればやる人ではないか」、と問うた。父親としてはやはり、普通の高校卒にこだわりたいし、ここで夫婦は一致する。しかし、彼女はその意志は全くないこと、もはやこれまでのように無理やり路線は彼女の反抗によってできないことは父親も認めざるを得ない、と苦笑する。「所属を失っても彼女が、気持ちよく自分のしたいことができ、友人たちとの世界を楽しむことから、思春期を生き直すことができたなら、何かを始めるのでは」と父親と話し合った。あまりにも漠然とした話に父親は戸惑い、親としての無力さをいやという程味わうはめとなった。親は子どものためと思って、どうしても自分たちの思うように子どもを動かしたくなくなってしまう。しかし、それは親たちの不安をなだめるだけに過ぎない、とBは看破したかのように親に屈しないぞ、と感じているように見える。筆者との話し合いはまだ継続中である。

#### 4.3 ③ C君の場合 よい子の反抗？—もういい子なんてやってられない—

Cは幼稚園、小学校と先生や近所の人に褒められる事はあっても何も問題らしいことも一切なく成長した。もちろん成績も常にトップでクラスをまとめる役を担任から頼まれてはしっかりとこなしていた。母親にとっては手がかからず、言わば自慢の息子であり、むしろ下の二人の妹に手を取られていた。中学校に入って大好きなスポーツのクラブに入部、元気な毎日であった。が一年の2学期途中からクラブ生と諍いがあったらしく、試合当日行かないことがあった。その日を境に登校が苦しくなり、行ったり行かなかったりが続いた。まだ定期試験はきっちり受けていて、学校へ行けば元気になってクラブの仲間と楽しげに帰ってきていた。それを見て母親は、やっぱりクラブ活動がしたいのだと思う、学校にも行きたいのだと思うとため息をつく。しかし、3学期はいよいよ行きにくいようでクラブの試合を一緒に行かずに、別の所からこっそり隠れて見て帰宅していたことがわかった。母親には見てきた試合の話をして楽しそうであったという。3年に進級後はしばらく毎日登校していたのでこれで安心と母親が

言い出した頃、やはり休みだした。一学期の定期試験も初めて受けられなくなった。次第に勉強もなくなり、“疲れた”と言ってよく眠るようになり、とうとう昼夜逆転の生活となり夏休みとなってしまった。一度だけ心療内科に行ったが彼は自分自身のことをかなり明確に話したようで(クラブ活動の問題)、当時大した症状もなく、通院を勧められることもなく、むしろ母親を支えるべく相談機関を紹介され筆者と会うこととなった。来談は母親のみでC自身は自分に何も問題はない、と言って相談に行くことは強く拒否した。夏休み明けから2学期は完全な引きこもり状態となった。そして、これまでにはない態度を見せ始め家族を困らせるようになった。ゲームに夢中になり、次第に高いデッキやソフトを買うように要求したり、居間のテレビをゲームで独占するようになり、文句をいう妹達にすごんで見せて脅すようにもなってきた。とうとう母親の財布にも黙って手を出すようになった。これまでは妹達にもやさしい兄であっただけに妹達のショックも大きく、母親は次々と起こる事態に振り回されていく。父親は海外に単身赴任中でとにかく母親1人で対処しなければならなかった。

母親の嘆きも大きく、どうしてこのようなことになったのか、と泣くばかりであった。母親とは、「彼がこれまで困らせたり、心配をさせたりしたことがないこと、反抗的な態度もなかったこと」を取り上げて話し合った。すると母親自身も夫方両親が厳しく、孫である彼にも要求が高く、それに合わせてやって行くことがどんなに大変であったのかを切々と語り、舅、姑を口汚くののしった。夫方のよい嫁として母親自身が無理を重ねてきたことと、そのために彼にもよい孫として頑張らせてしまったことに気がついてきたのである。会いに行く度に成績を聞かれていたそうである。これを語った後、母親は夫方両親に対して何を言われようと無理に付き合うことを止めている。つまり、よい嫁でいることを止めたのである。すると彼もよい子であることを止めてしまい、したいことを家でやり始めたかのようであった。母親とはこれを話し合い、「悪い子になっているのも彼には理由があること、つまり家庭と言う最も安心のできる空間で、彼自身変ろうとしているのではないか、とそこに何らかの意味がある」ことを話し合ったのである。母親自身も無理のあったことに気が付いたように、彼自身も同じ課題を抱えていることに気づいていった。父親は遠くでヤキモキしながらメールで母親とやりとりをして何とか母親を支えようとしている。彼は友人達との交流ができなくなったからか、家族で出かけることを要求、夏休みも家族旅行をし、冬休みには彼の要求どおり家族全員で父親の赴任先に海外旅行をした。その間彼は大変穏やかであったそうである。一方で彼は受験生でもあり、しかし、勉強は全くできないまま、受験は近づいてくる。母親は当初全日制よりも単位制などの高校を考えてはいたが、彼はそうした高校は行かないと強く言う。プライドの高い子だから、それなら勉強したらいいのに勉強もしない、と母親はため息ばかりであった。そのうちに2学期末の受験先決定の懇談日がやってくるのにCは学校に行けるかどうか母親をヤキモキさせたが、結局登校して全日制受験を決めた。塾に行く、と言ってみたりするが実際は行けないまま、不安はあるものの相変わらず家では勉強はできそうにない。妹たちにあれこれ命令をしながら居間に居座り、妹達も兄を遠ざけるようになっていく。これまでにかなりの学力があったのでレベルを下げれば可能であるが、受験先を絞ることに母親も苦慮した。机の上の勉強はできないが、彼は工学関係の立体模型などが好きで、その方面なら行ってもいいと考えるようになり、ようやく学校を見に行く、といった受験生としての行動ができた。父親も技術者であるので今は避けてはいるが、父親と同じ方向を向こうとしているのかも知れない。ただ父親は大学に進学しての勉強だと考えていた



らしく普通校への進学をCには勧めていたらしいが、Cの選択は職業高校であった。父親は反対であったが母親に任せざるを得ず、母親はCの意に沿うことしかできなかった。Cは他校を見る事もなく決定して、滑り止めの私学も担任の指導の下決定、親の送迎ではあったが受験をしてどれも合格した。合格後の説明会では、遅刻欠席を認めない、挨拶をする、といった指導に力を入れている学校とわかり、かつての彼の姿そのものであったので母親は彼に合っているかもと希望を持つ。彼も受験が済むと再びやさしい兄にもどりつつあるといい、家の中も落ち着いてきている様子。まもなく父親も海外勤務から帰国が決まり新学期から新しい生活が始まる、と母親は安堵した。長い間苦しんだが何だったろうね、と夫婦で会話した時夫は、それは君が変わったからだろう、と間髪を入れず応えたそうである。母親は苦笑するばかりであったが、ここで一応の終了とし、ここへ再び来ないことを祈っています、と母親は筆者に言って帰った。

#### 4.4 ④ D子さんの場合 母子のお互いへの依存—反抗はまだ?—

D子さんは高校（公立）に入学後の一学期に友人関係から不登校になり、退学。受験をし直して今の高校（私学、女子校）に再入学した。しかし、やはり一学期途中からクラスに馴染めず不登校となって相談室へは母親が訪れた。

彼女は幼稚園、小学校、中学校と特にこれといったこともなくやってきていたが、おとなしく、誘われるとついて行くタイプで、でも常に友人はいた。高校に入学後、すぐに友人はできたもののその友人との間でトラブルがあったらしく、その怯えは今も影響が強いと母親は嘆く。受験をし直して入った高校は彼女のこの失敗を知った上で引き受けてくれており、今は保健室よりも図書室の方が落ち着く、という理由で一日を図書室で過ごしている。時々教師が課題を与えに来たり、クラス担任が連絡に来たりといった毎日である。図書室であっても図書室で勉強をしていて定期テストをきちんと受けさえすれば、欠課にもならず進級を認めもらえる学校である。母親は、だからこれでよいと思う一方で他の子は教室で勉強しているのに、どうしてこの子だけ一人であんな所にいるのかと思うとつらい、としきりと泣く。他に3年生が一人図書室にいるがあまり交流はない。司書とは何か尋ねる時に会話するくらいらしい。そのような毎日なのでよく母親にメールが届く。退屈だとか、何か嫌な雰囲気だとかいった急を要する内容ではないが、本人もこれではよくないと思っているから色々私に言ってくるのだと思う、と母親は言う。筆者には、担任にもっと強く教室で授業を受けろ、と言ってもらった方がいいか、とか私がもっと本人に厳しく言った方がいいのか、など質問を繰り返した。母親の訴えを聞いていると学校は彼女が行っているのに、まるで母親も一緒になって学校に行きかねないほど気持ちは重なり、だからこそ彼女は学校にいながら何かと母親に連絡をしてくるようだ。その連絡内容を自分のことのように悩み解決してやりたいと悩む姿は、二人が全く同じ悩みを共有していてまるで一身同体である。母親としては離婚して以来親元にもどり親子二人で生きてきたので二人の間に何の違和感も感じることなくここまでに至った。

「Dの年齢を考えると二人で一つではなく、一人一人異なっても不思議はないはずだが、母親がDの代わりに悩んだり、考えたりするのはどうなのかな」、と筆者から投げかけて話し合った。母親はこのようなことはまったく考えてもいなかったらしく、DのためにD以上に考え悩んできたこれまでの

時間を考えた。Dにしても自分自身の問題でありながら、色々訴えると母親が懸命に考えてくれるので自分は何も考えないで母親に投げだしてさえいればよい、という状況を繰り返していたと言える。この状況を話し合ってから母親はできるだけ自分が考えて回答を与える、とか自分が動いてやる、などの行動を止めていく努力を始めた。また母親の仕事中に受けるDからの連絡は何をおいても優先させていたことを止めて、忙しい時にはそれを伝え母親の側にも事情があることを伝えるようにした。Dに対して母親としてだけでなく、働く女性としての顔を見せるようにしたのである。すると次第に在学中での連絡は減少していき、担任と話す時間が増えたそうで2学期半ばからは時々授業にでることもできるようになった。その間母親は筆者の前では一喜一憂しているが、彼女との距離感を保つように懸命に努力を続けていた。2年生に進級後はクラス登校ができるのではと期待しているが、彼女にはそうした思いをぶつけてしまわないように我慢しながら、見守った。

そうして2年生に進級すると彼女は新しいクラスの教室に登校し始めて今も続いている。母親は内心ハラハラしながらも彼女の登校に一喜一憂する姿をできるだけ見せずに、何気なく朝の登校を見送るようにして母親が彼女の問題にしゃしゃり出ないように相変わらず努力を続けていた。二人の間で長年培ったものは容易には解消することはなく、大人の側からの意識的な態度の変更と持続がなければそれらは簡単に元にもどってしまう。小さい時からの生き方でもあり互いに安心できるからである。母親には「Dの自分で始めた今回の努力を、今度は母親が心配のあまり邪魔をしてしまわないこと」だと伝え、今の母親の努力を支え続けた。友人間で生じる軋轢を時々母親にもらすので母親は聞いてやってはいるが、これまでのようにあれこれ教えてやることもなく聞き役に徹する努力をしている。筆者の前では彼女への不安を話しては涙を流しているが、それだけ母親からの娘への依存も強かったといえるだろう。Dの一番の不安はせっかくできた友人たちに自分が一歳年上であることが知れたらどうなるだろうか、と言う不安である。この不安については母親も気にしており二人に共通の不安と化していそうである。これについては母親と時間をかけて話し合っ、今では母親も自然に話せるチャンスがくるまで待っていればいいのではないかと今はあせらないようになってきた。

「人に合わせて生きようとする人にとってちょっとした違いは、大変な違いに感じられて大きな重荷となる。彼女のこれまでの生き方は簡単に変えられるものではないので、とても悩むのだが、一方自分流に言わば勝手に生きている他の人にとっては違いなどほとんど気にもならない。彼女にはまだ社会経験は乏しく話してやってわかるような次元ではない」ことも母親と話し合った。母親は社会人として働いているので、一方でかなり独自に動く人たちもいて、仕事に支障がない限り皆で許容し合っていることなど経験している。しかし、彼女には話してわかるわけではないことに気がついて、彼女の今いる世界での経験をしっかり理解して彼女なりに乗り越えることができるように支えることができれば、と考えるようになった。しかし、娘と二人ぼっちという世界は重く、娘から目をそらせて母親自身が何か別の物に関心をもち、その姿を娘に見せていくような生き方へ変えるとは簡単にはできない。関心は娘に集中してしまうのである。しかし、Dが2年生になって進路調査など、そろそろ社会へ目を向ける時期を迎えて、娘の社会への進出とともに母親自身も他に関心をもちざるを得なくなるのだろうか、と考えつつ母親との話を続けている。

彼女自身は母親への反抗らしき態度はこれまでに経験なく、ようやく、母親とは別の経験を持ち出

したところである。むしろかなり遅れてやってくるかも知れず、急激な形での母親への反抗が予想されるが、母親自身娘の行動に口を挟むことなく、また不安な様子もみせることなく、娘が自分らしく行動し始めたことを支える努力に懸命である。これは一方では娘との適切な距離をももたらすものである。娘からの反抗的な態度が起きてても冷静に見ていられるよう母親自身の成長が望まれる。

#### 4.5 ⑤ E子さんの場合 親だって負けてはいない—反抗と戦う—

Eは中一の途中からクラブ活動が負担となってきた。特に先輩からの指導が厳しくなって休むとどうして休んだと連絡が入る、というあたりから登校はしてもクラブは休む、という生活になった。とうとう学校にきているのにどうしてクラブには来ないのか、という追い詰められた状態となって、学校そのものへ登校ができなくなった。泣いて帰ってきてからは全く行かない。クラブの先生にも相談したが「いじめではなく、指導だ」と言われ反対に頑張るように言われる。そこでクラブは辞めて再び登校するかと思われたが、やはり学校で顔を合わすかも、と言い行けない状態になる。友達が毎朝誘ってくれるが行かない。定期テストだけは何とか行ったがそれだけであった。2学期後半にはもう昼近くまで寝てゲーム三昧、という生活となっている。

母親は自堕落な生活をさせるとますます駄目になると行けないと考えて、できるだけ家事の手伝いをさせるが文句をいいながらやっとする始末でそれも、段々となくなってきている。家庭は年の離れた兄や姉がいるがすでに働いていて帰宅が遅かったり、夜勤があったりするし、父親も単身赴任中で実際のところ毎日は母親との二人暮らしである。勉強が遅れることも気になり何とかさせていたが、全くのいやいや状態で、それもとうとうしなくなってしまった。母親はお手上げである。学校に相談すると校長先生からフリースクールを紹介されて、母親はもっとショックを受けた様子であった。学校側はもう登校すら期待していない、と感じたからである。Eの学校にはほとんど不登校の生徒はおらず、Eに対しても担任からの支持的な援助は期待できないと母親は感じている。母親は時々、不安にかられてEに対して思わず非難する言葉や興奮すると手さえ出してしまうと言い、彼女はその後家を飛び出してしまっている。そうしたことが2回あったが、2回ともさすがにEの方から母親に電話をかけてきて収まっている。この小さな家出は母親をさらに怒らせることになっている。きっかけはパソコンでのチャットによるゲーム遊びで、全く知らない人と対戦して遊ぶのだ、Eはその知らない人と盛んに会話していて色々な話をしていた。相手がどのような人かわからないので母親としては不安は大きいが本人は聞き入れず、諍いとなった。結局パソコンは点検と称して今は取り上げてあるが、そのうちやいやいと言ってくだらう話し、それも母親を不安にさせている。冬休みはゲームばかりにならないように買い物など一緒に外へ出るように心掛け、3学期の登校をめざした。しかし、始業式は登校できず、母親も本人もショックだったという。この時3回目の家出をしたのでEには“探すのが大変だから、お母さんが家を出る”と言い渡したという。

以前には尋ねてきてくれていた友人も今は来なくなり、電話もかかってこなくなった。外へ出ることを嫌がり、どうやら恐怖心があると母親には思えるようである。母親が彼女のことを困ってしまって電話でしゃべったりすると嫌がるし、このままだと引きこもりにもなってしまう、と母親の不安は膨れるばかりである。筆者としては「彼女の状態は不登校特有の睡眠の乱れや、外出不安、学習への集中困難、

ゲーム等の刺激への集中などを見せていて、登校へのエネルギーはかなり低い状態に陥っていると考えられる」ことを伝え、登校は今のところ難しいとの見通しを示した。母親はある程度納得もしたが、しかし、彼女の力が弱って登校もかなわないとはとうてい信じられない様子であった。彼女は一方ではゲームの話をおびれず、楽しそうに母親に話したり、小学校時代の友人に自分から電話をかけて楽しそうに話す、など元気をなくした不登校とは思えないようであった。

また、母親自身Eが中学校に進学したので、今度は自分も何かしようと思っていたところにこのようなことが起きたので、どうにも承服しかねる思いも強い。娘の問題をこころの病いと見るよりも、末っ子の我儘にも見えて、腹が立つ思いも同時に強かった。嫌なものは嫌、とただ言い張っているだけにもみえたようである。母親には「彼女の問題にばかり目を向けるだけではなく、何かしたいならその姿勢を見せることも彼女の役に立つ」ことを話し合った。程なくして母親は仕事につくための研修機関を見つけてきて、早速申し込んだという。母親もEと同様に直ぐに実行する人であり、いわば似た者同士の二人である。彼女には母親がまもなく仕事につく準備を始めることを伝え、自分自身も学校をどうするのか決めるようにせまった。彼女と激しいやりとりになり、母親も真剣になり最後には彼女に馬乗りになってまで最大限の力をむけてしまったという。Eは泣き出してしまったが、母親もクタクタになってしまって二人でその場で呆然としていたように思う、と母親。つまり、母親と互いに全力でぶつかって、母親の必死さを彼女も始めて経験したかのような場面であったかと思われる。

彼女には先輩のクラブ生の懸命な努力が見えないまま、ただ逃げる方法しか取れず幼く見える自己主張であるが、病むというより幼いまま中学生になったと考えると、嫌なものは嫌と叫んでいるだけともとれる。従って母親にも嫌なものは嫌、と言っているだけと見えたのかも知れない。一方母親の側もこれ以上子育てにばかり手を取られては自分は何もできないまま年を取る、という不安感も大きく、期待を裏切った娘に対しての憤怒もあっただろう。これが娘には理解できないにしても、母親の抱えた不安やイラ立ちなどが二人のまるで力相撲?のような争いのなかで娘に伝わったのは間違いがない。それとこの学校はE以外に不登校生はいない、という昨今では珍しい状況もあって、Eはその状況にも押されるように学年が変わると登校を始めた。不登校生が日常的に何人もいる学校であるなら、別室登校などに迎え入れられて居場所ができてしまうと、こんなに早くはクラスへの登校はしなかった可能性も十分考えられる状況であったからである。

彼女が登校を始めたので、母親は念願どうり自分のための就職へ向けて活動を始めた。思春期を迎えた子どもの前ではこれがもっとも正解とも言える親の姿かも知れない。親にはすでに世話を求めているわけではなく、むしろどうやって生きているの?、という子どもの中で生じている不安や疑問にその背中で見せるのがもっとも説得力があり、衝突にもならず、彼らが自分からその背中に意味を見つけるからである。

## 5. まとめと考察

長々と事例を紹介してきたが、筆者にとってはどの面接場面においてもその時の展開を彷彿とさせてくれて、彼らのエネルギーに喝采を送りたい思いである。

事例①と②は何れもこれまで未解決だった問題が思春期で暴発したかのように激しい行動化や或いは病的な世界への落ち込みなどが見られ、家族を翻弄した。①では、喘息のためではあったが、母親から生活のほとんどをコントロールされて成長してしまった男子の物語である。母親はそれが彼の発作が起きるのを守り、彼のためにしていると信じていたが、一方で彼の出口を塞いでいたことに全く気がつかなかった。確かに、彼は自身の発作にも困っていたであろうと考えると、自分の生活域への母親からの勝手な侵入にも文句が言えなかったのかも知れない。相互にどうにもならないまま危機を迎えてしまった、と言える。高校からの不登校は、家族にも学校側にも理解ができないまま進行してしまって、あつという間にどうにもならない状況に陥ってしまった。そこから彼のこれまでにない行動（バイトの開始やバイク走行）が始まるのだが、これとて家族には到底理解できる行動ではなかった。まさに大混乱である。弟にも影響が出てきて、我慢できなくなったように自分へも関心を払ってくれと母親に訴えている。この頃から母親は我に帰ってこれまでを振り返り、母親を強く拘束していた彼の発作への不安を払拭している。もっと早くに気がつくことはできなかったのか、と当然思われるだろう。しかし、家族の生活とはある意味習慣で成り立っているところがあり、いつもそうである、ということが家族の安心感を生んでいるところがある。それを打ち破るのが思春期のパワーではないか。彼はそれを遺憾なく発揮し、母親との間の妙な絆を断ち切って、放置されることを望んだかのように行動している。ここで初めて思春期の子どもにとって必要な大人との距離を産むことができ、彼はこれまでにはない接近を求めようになった。生活の管理もどのような形にせよ彼自身で行っているし、母親とは興味を共有して共に行動するという新たな関係が成立したのである。今後は彼自身が何をして生きていくのかは彼自身が見つけて生きていくはずであり、家族は側にいて必要な手助けをしてやるだけでよい。②では母親自身が困難な症状を持ち、それに子どもを巻き込んでいたのだが、やはり子どもの側から母親と離れようと動いている。しかし、それまで依存していた対象との分離は不安を伴うのは当然で、何の保証もない世界に進むことを意味するかのように彼女は強い精神症状を呈してしまった。通院と投薬に助けられながら彼女は何とか立ち直ったが、それを助けたのは彼女の友人たちである。子ども同士の健康な世界は家族生活の閉塞感とは全く異なる世界を与えてくれたはずで、彼女はこちらの世界を選択しようとうごめいた、とも言える。彼女はやがて母親との息苦しい窮屈な世界から自らの力で脱却した。それを支えたのは父親であり、やがて父親とは安心の混じった関係が産まれていく。一方父親は筆者との話し合いでは何度も、彼女をどこかに所属させてやりたい、と訴えて、何度もそれは彼女の願いではないことを筆者と共に確かめずにはおれなかった。家庭生活ではそうした父親としての期待は全く口にせず、彼女の話をもひたすら聞いてやるという役目をなんとか果たしている。それが、今の彼女には最も必要なことであり、何かを探し始めるならその手伝いができるといいと父親と話し合ったのである。

③ではよい嫁として生きるあまり、息子にもそれに従わせてしまっていた母親の物語である。いつも褒められ、よい点数を取ることで親を安心をさせてきたのに、いつの間にか登校を渋り、勉強もさぼり出し、家の中では我儘を言い、妹たちを困らせ、居間を占拠して家族の困惑にも耳を貸さないやっかいな人へと変身してしまったのである。母親は、自身がよい嫁として無理を重ねてきたことと重ね合わせて彼のことを考えられるようになると、息子の行為を責めるのではなく、妹たちにはむしろ別の配慮をして兄弟関係の悪化を防いだり、できないことはできないと言いつつ、彼の生活を助けながら家族が破

たんしないようにはからってきた。彼は生活のリズムも乱れ、勝手気ままな、嫌な存在として家族に君臨したかのようで、父親とは接点を持つとはしなかった。しかし、夫婦は常に連絡を取り合い、父親は家族で起きていることをほとんど知ることができて、できるだけ母親を支えようとしていた。夫は遠く（海外勤務）でハラハラしているだろうと母親は苦笑していた。受験についても実際は母親に守られながらも、自分なりに決定して今の自分の興味に対して忠実に選択はした。父親の意見は黙殺したが、今の彼にはまだ将来の展望など考えられないので、父親の意見が正しいと思ってもできなかつただろうと思われる。そうした意味ではまだ彼は健康さを欠いてまま選択をしたといえ、危うさはあるだろう。しかし、いい子を止めて小さな家族という安全圏のなかではあっても嫌な人になることができたことが、彼のこれからの生き方に大きく影響をあたえるのは間違いないであろう。他者の評価を気にするのではなく、嫌なことは嫌と言う自由も持ちあわせて始めて自分らしく生きられるだろうからである。④では母一人子一人という状況下で互いに頼り合って生きてきたが、子どもが不登校になって初めて母親が困ってしまった物語である。子どもの訴えを母親が我がことのように代わりに考え、解決をしてやる、というのが二人の一貫したやり方であった。しかし、高校にもなると親が学校へ乗り出すわけにもいかず、しかし、彼女の訴えは毎日のようにあり、どうしてやったらよいかというのが最初に相談であった。そこで筆者は、二人を分ける作業から始めた。その文脈は誰のものか、誰が考えたのか、と二人の間に線を引く作業である。やがて母親は筆者に報告をしなければならないので、彼女を観察するようになった。つまり、二人に距離が生まれ、彼女に対して一々反応しなくなったのである。すると彼女はこうした母親に怒るわけでもなく、自然と傍にいる別の人である担任や司書とよく話す様になり行動が変わってきた。これは彼女が大人であれば親以外の人と十分な会話ができていることを示しており、今までそのチャンスがなかっただけであると言える。それだけではなく、母親自身も娘に対して不安を持ちやすく、それをすぐに口にしてしまって二人が不安を共有するという事態に陥っていたが、これも止める努力を意識していた。できるだけ動揺しないように見せて、彼女と負の感情を共有しないようにしたのである。すると彼女はそれも自然に受け止めて、一々訴えなくなってきた。不安を共有する習慣が薄らいできたからか、新学期からの登校は時々不安をもらす程度で一度も中断することはない。自分で始めた努力に自分で信頼を置きだしたと言える。母親はなかなかこの自分への信頼や娘への信頼感は維持できにくいようであり、時々筆者の下でこの不安を口に出して泣く、という作業が今も必要である。やはり、大人の方が変わることは大変である。⑤ではまだ中学生で反抗のレベルは幼く、我儘と紙一重という実態ではある。彼女としては学校という困難をもたらす場面から撤退したかったのは紛れもない。それは他の不登校生と何ら変わりはない。学校が不登校を認めてくれていたら（担任やクラブ顧問はむしろ頑張れという指導）、違った展開となっていただろう、と予測はされる。それと母親自身の中年クライシスとしての危機感が自身の中に渦巻いていたので娘の問題についてむしろ客観的に見ることもできていた。お互いのためにもならないし、学校の支援もない中で母親が本気をだしたわけで、子どもはその本気に今の段階では降参したと言える。子どもの反抗には意味があり、大人は聞き届ける努力が必要であるとよく言われる。しかし、この場合のように大人が本気で向かうと子どもの側も大人を理解するチャンスをもたらすこともあるわけである。しかし、身体ごと巻き込むので対決は危険も孕んでいる。ただ力を出せば良いと言うわけではなく、そこには勝ち負けではない、わかり合いたいという願いも含まれ

ているからこそ力を通して何かが伝わるのかも知れない。

筆者のような仕事は世間の様子とはいささか異なってみえるだろうと常に思うことが多い。ただ、いつもの部屋で相談に来られた方と決まった時間に会い続けるだけであるが、いつの間にかドラマのようにストーリーが展開して、家族は動き出す。筆者は部屋からは一步も出ることなくこうしたドラマに立ち会うことになるのである。しかし、家族が勝手に動き出すのではなく、筆者の持っている専門性（見通しを持っていること、常に再検討される病理への理解を得ていること、受動的でありながら、能動的にもなる働きかけ、など）が背景にあつての上である。筆者が特別な指示をするわけでもなく、理解を得たと相談者が感じる瞬間は確実に相談者の気持ちが動く時である。今回はこの専門性はできるだけ背後において、思春期の子どもと暮らす家族の物語を描いてみた。長期間こうして会いに来る家族は、その時は困難を抱えてバラバラになっているように見えるが、実は見えない部分では支え合っているからこそ諦めないでやってくる。こうした経過はしかし、実に長い時間を要する。今回も最長で2年半、最短で半年が経過した事例の報告である。

この思春期という問題はかくも大人を翻弄するが、この困難を乗り越えるのには家族だけではやはり辛すぎたり、疲れ切ったりしてしまうだろう。このような時に話に耳を傾けてくれたり、気がつかない部分に気をつけさせてくれたりする人がいることにより親はなんとか持ちこたえて、やがて子どもを理解し、子どもへの身近な援助者へと変身する。どんなにつらい状況でも会い続け、話しができていける限り、こうした手助けができることを筆者はなによりも、楽しみとしているからこそ続けていける。何のことはない、筆者の側がエネルギーをもらっているのかも知れない。

#### 参考文献

- 氏原 寛・菅佐和子. 思春期のこころとからだ ミネルヴァ書房 (1998).
- 座間味宗和. 児童精神病理学 清水弘文堂 (1979).
- 関 忠文・岡村一成・大村政雄. 青年心理学セミナー 福村出版 (1988).
- 馬場謙一編. 現在のエスプリ「思春期の拒食症と過食症」NO.232 至文堂 (1986).
- White M. Epston D. Narrative means to therapeutic ends. South Australia ; Dulwich Centre Publications. 小森康永 (訳) 物語としての家族 金剛出版 (1992).
- 松田 哲夫編. 家族の物語 あすなろ出版 (2011).
- 村瀬喜代子. 子どもと大人の心のかけ橋 金剛出版 (1996).

